



巻本」の中で「丹後といふ説は、橋立をあまのはしだてと心得損じたる也」と指摘している。また、『大日本地名辞書』丹後与謝郡の項にも「和州の倉橋なるをば、後世其冠辞橋立といふを附会して彼名を此に移したるならん」とあり、現在、天の橋立の西南に倉梯山や倉梯川（野田川）があるのを後人の付会としているが、首肯すべきであろう。

さて、『貫之集』には、倉橋山を詠み込んだ次のような歌が収められている。

大原野在原元方がもとにおくれる  
（倉橋山・朝霧山・朝霧山）

しら雲のたなびきわたるくらはししの山のまつとも君は知らずや  
 右は、御所本の本文により、表記を少し変えて引用したが、『私家集大成I』に翻刻された歌仙家集本では第二句が「たなびきわたる」となっているほか、『夫木抄』巻二十所収の同じ歌でも「たなびきわたる」とある。「わたる」ならば、「くらはし山」の「はし」と縁語になり、貫之は、別に「白雲のたなびきわたる、あしひきの山のたなはし、我もわたらん」<sup>(1)</sup>（貫之集）とも歌っているので、「たなびきわたる」がもともとの本文であろう。後に藤原朝忠が、「天徳四年内裏歌合」の一番左に「くらはし山のかひより春がすみ年をつつみや立ちわたるらむ」と詠み、判者の藤原実頼から「橋にわたるなど

いふもさもありなむ」と評されているが、その先蹤となるものである。

第四句の「まつ」は、いうまでもなく、「松」に「待つ」を掛けている。つまり、貫之は、「私が待っていることも知らないのですか」と、元方を軽く批難しているわけである。いわば一種の挨拶の歌で、「松」と「待つ」との掛詞は珍しいものではないし、さほど注目すべき作品ではないのかもしれない。とはいえ、問題なのは、「待つ」というために、なぜ倉橋山の松をもってきたかということである。朝忠の場合は、歌題の「霞」によって、まず「霞：立ちわたる」という詞句を思いつき、そこから「くらはし山」「年をつみて」を引き出してきたのであろう。倉橋山を歌枕の中から選びとるに至った道筋がはっきりしている。しかし、貫之の場合、たなびきわたる白雲を歌わなければならない前提が与えられているわけではなく、「たなびきわたる」が先に心に浮かんで「くらはし山」が連想されたのではあるまい。むしろ、倉橋山が先に心にあって、それと関連する「たなびきわたる」を思いついた、と推測した方が自然である。それだけに、貫之が倉橋山を詠み込んだ理由を考えてみる必要がある。

倉橋山を詠んだ歌は、古く『古事記』下巻に（ただ、貫之が『古事記』を読んでいたかどうかはわからないが）、速総別王が女鳥王とともに倉橋山を越えて逃亡したときの作として、

はしたての倉橋山をさがしみと岩かきかねてわが手とらすも  
 はしたての倉橋山はさがしけど妹とのぼればさがしくもあらず

という短歌形式の二首の歌謡が見え、『万葉集』でも、  
 椋橋の山を高みか夜ごもりに出でくる月の光ともしき

(巻三、二九〇、間人宿禰大浦)  
 倉橋の山を高みか夜ごもりに出でくる月の片待ちがたき

(巻九、一七六三、沙弥女王)  
 橋立の倉橋山に立てる白くも見まく欲りわがするなへに立てる  
 白くも

(巻七、一二八二、作者未詳)

と歌われている。間人大浦の歌は『猿丸集』に、沙弥女王の歌は『古今六帖』第一にも採られている。

さらに、『古今六帖』所収の、

くらはしの山の雪にもあらなくにまつ人さきに身のふりぬらん  
 (第一、五一九、人丸)

(第二、八八三、作者未詳)

という二首も、おそらくは、大和国において詠作され、貫之の時代以前から伝承されてきた古歌であろう。以上の六首のうち、二首に白雲が出てくるが、貫之の歌に「しら雲のたなびきわたる」とあるのも、それらを念頭においた表現であろう。西本願寺本『躬恒集』に「延喜三年十月十九日、仰せによりて歌三つたてまつる。女一のみこの裳着たまふときに、内よりさうぞくたまふ。その裳にみづくきかたきにする歌」との詞書のもとに収められた、

しら雲のたちのみわたるくらはしの山に心をおもひつめつつ  
 も、倉橋山の白雲を歌っている。貫之の歌と同じく「わたる」を

「はし」の縁語としており、さらに「つめつつ」は、「くら(倉)」の縁語となっている。躬恒は、「女一のみこ」を思う気持を「心をおもひつめつつ」と表現しようとし、「つめつつ」と縁のある倉橋山を想起したのである。貫之の歌の詠まれた年が不明であるので、

貫之の歌と躬恒の歌との先後はわからない。ただ、詞句の類似から見て、両者の間に影響関係が想定できそうである。なお、『古今六帖』第一所収の「ことにのみ」の歌の結句は、『統国歌大観』では「たゆたひにけり」となっている。『古今六帖』の本文としては「たつたひ」が正しいとしても、これは、元の資料に「たゆたひ」が「絶多比」とでも書かれていたのを誤読したのではなからうか。

ともあれ、貫之の時代に、倉橋山は、右に紹介した諸作などによってよく知られていた地名であった。歌枕を歌人たちの共通の知識の中にあつた地名とするならば、すでに歌枕化していたといえるであろう。少し後の例ではあるが、藤原実方の作に、

春宮にさぶらひける絵に、くらはし山に郭公とびわたりたる  
 ところ

五月聞くらはし山の郭公おぼつかなくも鳴きわたるかな

(『拾遺集』巻二、二二四)

がある。建治本『実方集』の詞書は、もっと詳細であつて、「東宮にさぶらひけるおはんあふぎに、くらはしやまをかけりけるに、ほととぎすのとびわたりたるかたあるところに、人々みな歌つかうまつりけるに」と書かれている。倉橋山は、扇などに描かれる絵の題材ともなっていたらしい。だとすれば、貫之が倉橋山を詠んだとし

ても、別に何ら不思議はないともいえる。が、しかし、貫之の時代において、倉橋山という山がよく知られていたとはいえず、その山の松までがよく知られていたわけではなかった。少なくとも、貫之以前に、倉橋山の松を詠んだ例は見出せない。つまり、松から倉橋山が連想されたとは思えないのである。松などというありふれた木は、実際に倉橋山にもあったであろうし、貫之が倉橋山を実見したことがないにしても、松があるであろうと想像して倉橋山を出してきたとも考えられるかもしれない。しかし、それでは、当時の和歌として効果的な修辭とはいえない。また、貫之の時代ならば、松の名所として、たとえば播磨国の高砂が著名であったから、単に「松(待つ)」をいうただけであるのならば、高砂の松でもよかったはずである。『貫之集』には、高砂の松を詠んだ歌が五首収められている。にもかかわらず、貫之は、元方へ贈る歌には倉橋山の松をとりあげたのである。これは、当時の和歌の常識からいえば、元方が大和国にいたために大和国の歌枕の倉橋山を詠んだと考えるべきであらう。

貫之の時代の前後の作で、貫之の歌と同様、「地名+松(待つ)」の構成をとっている例には、次のようなものがある。

## 題しらず

在原行平朝臣

① たち別れいなばの山の峰におふるまつとし聞かば今かへり来む

『古今集』巻八、三六五

みちのくのうた

② わがせこを都にやりて塩釜のまがきの島のまつぞ恋しき

『古今集』巻二十、一〇八九

女のもとに男、かくしつ世をやつくさん高砂のといふこ  
とをいひつかはしたりければ  
よみ人しらず

③ 高砂のまつといひつつ年を経てかはらぬ色と聞かば頼まん

『後撰集』巻十二、八六四

あひかたらひ侍りける人、みちのくにへまかりければ

よしのぶ

④ いかでなほわが身にかへて武隈のまつともならむ行く人のため

『拾遺集』巻八、四六〇

題しらず

よみ人しらず

⑤ あふことをいつとも知らで君がいはむときはの山のまつぞ苦しき

『拾遺集』巻十一、六八二

①は、行平が因幡守となって赴任する折に詠まれたとされている歌で、それで「いなばの山」が詠み込まれているのである。「いなばの山」は、因幡国の稲葉山と見られている。②は、東歌の一首であり、本来は、塩釜の近くで歌われていた民謡であろう。これを歌っていた人々は、塩釜のまがきの島を現実を知っていたわけです。『万葉集』の倉橋山の歌が詠まれたのと似たケースが想定できる。③は、男より、「かくしつ世をやつくさむ高砂のをのへに立てる松ならなくに」(『古今集』巻十七、九〇八)という古歌を贈ってきたので答えた歌である。高砂をいったのは、もちろん、古歌に高砂の松が詠まれていたためである。④は、女の行く先が陸奥国であった

がゆえに、その国の著名な歌枕である武隈の松を詠み込んでいる。⑤に見られる「ときはの山」は、あるいは普通名詞かもしれないが、いずれにしても、長い期間を待たずに待ち続けていることが暗示されているのである。「時」の意を掛けるためにも、「ときは」とする必要があった。つまり、右に掲げたそれぞれの歌において、地名を詠み込むことの何らかの必然性が存しているのである。貫之の場合もまた、そうであったはずである。

一方、『貫之集』には、倉橋山の歌のすぐ後に、次の一首が収載されている。

忠岑がもとにおくれる

甲斐がねのまつに年ふる君ゆゑに我はなげきとなりぬべらなり  
やはり、「地名+松(待つ)」の形になっており、ここでは、「年ふる」「なげき(投げ木)」が松の縁語となっている。甲斐が嶺を詠んだ歌は、『古今集』巻二十の東歌に、

甲斐がねをさやにも見しがけけれなく横ほりふせるさやの中山  
甲斐歌、一〇九七

甲斐がねをね越し山とし吹く風を人もがもやことづてやらむ  
甲斐歌、一〇九八

の二首が見られ、『土佐日記』に「ある人、にしぐになれど、かひうたなどいふ」とある「かひうた」も、右の『古今集』の歌などではなかったかと推測される。したがって、貫之はもちろんで、同時代の歌人たちは、甲斐が嶺という地名をよく知っていたと思われる。貫之は、延長二年に「甲斐がねの山里みればあしたづの命をもたる

人ぞ住みける」(『貫之集』)とも歌っていて、これは屏風歌であるので、屏風の名所絵に甲斐が嶺が描かれたりもしたようである。ただし松を詠んだ例は、やはり貫之以前に見あたらず、その点、倉橋山の場合と条件が同一である。そして、貫之の甲斐が嶺の歌の場合、歌意からも推察できるように、忠岑は甲斐国に滞在していたのである。『貫之集』の詞書ではそれが略されているが、壬生忠岑の甲斐下向に関しては、『忠岑集』に明証がある。忠岑は、陽成上皇の命を受けて、延喜十六、七年ごろ、どうやら駿馬を求める目的で甲斐国の巨摩郡あたりへ赴いたらしい。<sup>6)</sup>

とすれば、元方への歌に倉橋山が詠まれたのも、元方が当時、大和国にいたゆえであることは、まず疑いあるまい。さらに、「やまとに侍りける人につかはしける」との詞書を付した、

こえぬまは吉野の山の桜ばな人づてにのみ聞きわたるかな

(『古今集』巻十一、五八八)

という貫之の作品があることを考え合わせてもいい。吉野山は、いうまでもなく大和国の代表的な歌枕である。そして、元方が大和国にいる以上、貫之は、元方の来訪を待っているのではなく帰京を待っていることになる。在原元方は、『中古歌仙三十六人伝』に「左近衛中將業平孫。筑前守棟梁子」とあり、『古今集目録』でも、それに若干の記事が加わるくらいで、経歴のよくわからない人物である。大和国へ下向した事実についても他に資料はなく、詳細は不明である。ただ少なくとも、倉橋山が長谷寺に比較的近いからといって、長谷寺参詣などの短期間の滞在ではなからう。長期にわたるも

のでなければ、「まつとも君は知らずや」との表現がふさわしくない。おそらくは、大和守か大和介としての赴任ではなかったかと思われる。

ともかくも、貫之は、大和国に滞在中の元方へ贈る歌を詠作するにあたり、ふさわしい歌枕として同国の倉橋山を選びとった。しかし、なお疑念は残る。忠岑のいた甲斐国とは違つて、大和国には、杉との関連があまりに密接な三輪山は別にしても、他に、前にあげた吉野山、また立田山・葛城山・春日山など多くの名所があった。松のあるところは山とは限らないので、山以外の名所でも不都合はなかつたはずである。それなのに倉橋山が選ばれたのは、どうしてであろう。松を詠んだ先例のある地名であるかどうかは、倉橋山に先例がないのであるから、問題にならない。

前に引いた藤原実方の歌では、倉橋山の「くら」に「暗」の意を掛けたと解されており、たとえば『八代集抄』には、「五月やみくらはし山——五月やみはくらきといはむとて也」とある。後代には、これはごく一般的な修辭となり、『和歌初学抄』にも「くらはし山 ハシニソフ、クラキニソフ」と書かれている。実方の歌の内容から推測すると、彼の見た扇の絵には、五月闇の倉橋山が描かれていたのであろう。ということは、実方の歌以前に、倉橋山といえは暗い山、すなわち暗橋山とする感じ方が成立していたわけで、そ

のことは、貫之の時代にさかのぼらせて考えてもいいように思う。間人大浦の歌に「出で来る月の光ともしき」とあったが、月光が乏しければ、あたりは暗いことになる。作者自身の意図がどうであつたかにかかわらず、後代の人は、この歌から暗橋山のイメージを感じとつた可能性がある。貫之が歌つたように、白雲がたなびきわたつていたとしても、山の中は薄暗いであらう。上三句が貫之の歌と類似する伊勢の一首、

しら雲のたなびきかかるとみ山には照る月かげをよそにこそ見れ

では、白雲のたなびくゆえに月影が差さずに暗い深山の夜が詠まれている。それに、くらぶ山や小倉山の「くら」に「暗」の意を感じとつて、

くらぶ山にてよめる

梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける

〔古今集〕巻一、三九

延喜御時に、秋歌めしければたてまつりける

秋霧のたちぬるときはくらぶ山おぼつかなくぞ見えわたりける

〔後撰集〕巻六、二七

なが月のつごもりの日、大井にてよめる

夕づく夜をぐらの山になく鹿の声のうちにや秋はくるらむ

〔古今集〕巻五、三二

と詠んだ貫之が、倉橋山の「くら」には「暗」の意を感じとらなかつたとは考えにくい。元方の歌にも、

月をよめる

秋の夜の月の光しあかければくらぶの山も越えぬべらなり

〔古今集〕巻四 一九五

があり、彼もまた、貫之の歌を大和国で受け取って、「くらはしの山」を「暗橋の山」と感じたに相違ない。

要するに、「しら雲のたなびきわたるくらはしの山の松」は、貫之のイメージでは、白雲が一面にかかって薄暗い高山の、おそらくは尾根上に立っている松であった。それは、まことに寂しげな光景であって、その寂しげな光景に、元方の帰京を待ちわびる貫之の心情が重ねられているのである。倉橋山の松が貫之自身であるといってもいい。そしてそこに、倉橋山の松を詠み込んだ貫之の意図があったと思われるのである。何でもないような一首でありながら、十分に計算された表現の作品といえよう。

ちなみに、貫之が晩年に執筆した『新撰和歌』序に、「橋山晚松、愁雲已結」との一節がある。橋山は、黄帝の墓があるとされる中国の山であって、倉橋山とは何の関係もないともいえるが、私は、この一節を書く貫之の意識の内に、白雲のたなびく倉橋山の松のイメージが、なかったとはいえないような気がするのである。

注

(1) この歌の第二句は、歌仙家集本・御所本・西本願寺本が一致して「たなびきわたる」としている。

(2) 沙弥女王の作でありながら、『古今六帖』第一の作者名には

「はしうとのおほうら」とある。

(3) 「くらはしの山の雪」の一首につき、石塚龍麿の『古今歌六帖』には、貫之の歌を引いて「此歌のかへしなどにはあらざるか」とある。しかし、貫之の歌とじっくり合うようには思えない。

(4) 「みづくかたき」は「水茎形木」であろう。なお、歌仙家集本の詞書に従えば延喜十三年の作となる。「女一のみこ」は、勤子内親王(峯岸義秋氏説)とも均子内親王(村瀬敏夫氏説)ともいわれている。

(5) 因幡国から上京する折の歌とする解もあるが、いずれにしても、行平が因幡守となった事実と関わる点は変らない。

(6) 壬生忠岑の甲斐下向の目的などについては、かつて「壬生忠岑」(白珠)昭47・10)で述べたことがある。